

まえがき

1945年8月の広島・長崎への原爆投下から70年が経過しました。その間、冷戦期のイデオロギー対立の下で米ソを中心に核兵器の開発競争が展開され、半世紀にわたって人類は滅亡の危機に直面しました。東側陣営の崩壊によって冷戦が終結し、核戦争の危機はいったん遠のいた感がありましたが、世界が安堵し、平和の配当が期待されたのも束の間のこと、その後、国際社会は平和でも安全でもない状況が続いています。核大国の米国とロシアの核弾頭数は大幅に削減されたものの、アジアでは新たにインド、パキスタン、そして北朝鮮と核開発が続きました。

そのアジアでは相変わらず権力政治が横行し、なかでも東アジアは中国の海洋侵出、日中、日韓の間の領土問題、日中、日韓の間の歴史問題、北朝鮮の核開発などによって世界で最も危険な紛争地帯のひとつになりました。しかもこの地域には平和と安全保障を目的とする地域国際機構も、平和に関する多国間国際政治対話メカニズムも構築されていません。また安全保障共同体創造の動きはおろか、紛争予防メカニズムの構築の動きすらみられません。それゆえに、平和維持と国家の安全保障を昔ながらの軍事同盟による勢力均衡に頼らざるを得ないのが現状です。こうした不安定な国際安全保障環境の下で日本は軍事力の均衡を維持するために日米安全保障体制の強化を図る一方で、集団的自衛権の行使の名の下に戦争を行うことができる「普通の国」になろうとしています。

被爆70周年を迎えた今日、世界はどれだけ平和になったのでしょうか。国家はその国民にとってどれだけ安全な住処になったのでしょうか。冷戦が終結したものの、一方でグローバル化が進み、他方でエスニック政治の延長であるエスニック紛争が世界各地で勃発しています。戦後70周年にあたる2015年には国内避難民を含め世界の難民数がついに6000万人に達し、過去最高記録を更新しました。グローバル化の進展、科学技術の革新、情報伝達手段の飛躍的発達、さらには自由と民主主義イデオロギーの普及にも関わらず、国家というものは人々にとって必ずしも安全で住みやすい場所ではないようです。厄介なことに、核兵器の拡散に加え、独裁国家、国際テロ、地球温暖化、自然環境破壊、原発事故など人間の自由と安全を脅かす要因がこれまでになく多様化したことから、この茫洋とした平和と安全保障問題を読み解くことはとてつもなく困難な時代に突入していると言えます。

平和とは何でしょうか。平和を創造するにはどのような手だてがあるのでしょうか。安全保障とは何でしょうか。人間の安全を保障する安全保障政策はいかにあるべきでしょうか。こうした問題関心から被爆70周年記念事業の一環として広島市立大学広島平和研究所では『平和と安全保障を考える事典』の編纂に取り組むことにいたしました。もともと平和に関する研究は、体系化が進んでいる既存の学問領域とは異なり、いまだ形成途上にある学問領域です。また平和と安全保障を読み解くには学際的なアプローチが不可欠となります。そこで本事典で取り扱う領域は、①広島・長崎の被爆、②軍備・核兵器、③国際政治と安全保障、④国際政治史及び戦争の歴史、⑤紛争理論と戦争論、⑥平和運動及び平和思想、⑦平和構築、⑧法と人権、⑨原子力問題、⑩環境と開発、の10分野に絞り、それぞれの分野に造詣の深い専門家に執筆協力をお願いいたしました。

私たちは後世の厳しい批判に耐えうる事典の編纂を目指しました。とはいえ、本事典の扱う領域の広さ、激動を続ける現下の国際情勢の下で漂泊を続ける平和と安全保障パラダイムを前にして、項目の選定及び項目の内容に関して至らぬ点が多々あるかと不安でもあります。読者の皆様のご批判を仰ぎたいと思います。最後に、平和の創造に志をお持ちの方々の国際情勢へのご理解、平和創造の思索と行動、さらには平和政策の実践において、本事典が幾ばくなりとも貢献できるのであれば、まことに幸甚であります。

なお、本事典の刊行に際して、広島で音楽を通じて平和をめざす活動を続けている特定非営利活動法人「音楽は平和を運ぶ」(松尾康二理事長)から一部出版助成をいただきました。事典の編集を通じて平和の創造を目指す研究者の活動にも広くご理解をいただき、ご支援を賜ったことに深く感謝いたします。

その他、本事典の編纂にあたり、多数の皆様からご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

2016年2月

編集委員を代表して
広島市立大学広島平和研究所長
吉川 元